

# カントのコペルニクスの転回

村山保史

カントの哲学を特徴づける言葉を一つ挙げるなら、コペルニクスの転回が選ばれてもよいであろう。カントがこの転回を基点として彼の哲学を構築したことは周知の通りである。しかし一方で、コペルニクスの転回がカントの著作では一度も使用されない言葉であることを知っている者は少ないであろう。こうしてカント自身による明確な定義のないコペルニクスの転回は、研究者によつてさまざまに解釈され、それに相当するドイツ語にも一致を見ないような状態である。本論は、こうしたカントのコペルニクスの転回の一解釈である。

## 1. 〈対自的〉と〈対他的〉

コペルニクスの転回に相当する説明は、『純粹理性批判』第二版（一七八七年）の「序文」にある。「序文」は批判全体の構想についての説明を含んでいる。われわれは「序文」を手がかりとして批判とは何かを明らかにし、その上で批判におけるコペルニクスの転回の意味を浮き彫りにすることにしよう。

第二版の「序文」では、批判は形而上学「その方法についての論文」（B XXII）であるとされる。批判とは何かを明らかにするためには、形而上学の方法を明らかにしなければならぬ。

カントは、理性〔による認識〕の学として「学の確実な

道」(B IX)を辿るために形而上学が採用すべき方法を、すでに確実な道を辿っている学を参考にして明らかにしようとする。例えば、論理学は古代から一歩も後退する必要なく確実な歩みを辿ってきた。その理由は何であらうか。論理学の特徴は、思考の形式的な規則にのみ関わることである。カントはこのことを、論理学においては「理性が自己自身と関わる」(B X f.)、あるいは「論理学において悟性は、自己自身とその形式以外の何ものとも関わることはない」(B X)と表現している。この、自己自身にのみ関わるという特徴、言い換えれば「閉鎖的で」「自己」完結的」(B VIII)であったことが、論理学が最初から確実でありえた理由である。論理学は、自己自身のみを問題とする、いわば〈対自的〉な学であり、その対自性の徹底ゆえに、すでに出発点から確実でありえたのである。しかし一方で、カントは論理学を厳密な意味での学として認めない。論理学は知識の判定に役立つとしても、新たな知識を獲得できないからである。この意味で、論理学は厳密な学ではなく、諸学の「予備学」にとどまる。では新しい知識の獲得のためには、いかなる学が必要なのか。

そのためには、自己自身のみならず客観とも関わる「本

来的、客観的に学と呼ばれる学」(B IX)が不可欠である。新しい知識の獲得には、いわば〈対他的〉な学が必要なのである。数学や自然科学(物理学)は客観とも関わる対他的な学であった。しかし「学の確実な道を辿ることは、理性が自己自身のみならず客観とも関わらねばならないときには、言うまでもなく理性にとつてはるかに困難とならざるをえなかった」(ibid.)。対他的な学であった数学や自然科学は、最初から学として確実な歩みを辿ってきたわけではなく、それまでに長い模索の期間を経いたのである。

## II. 思考法の変革

### A. 数学と自然科学

長い模索からの脱出のためには「思考法の変革」(die Veränderung der Denkart)」(B XIX)が必要であった。学の確実な道へ至る変革はいかになされたのだろうか。カントは「思考法の変革」を「思考法の変革された方法」(B XVIII)と言い換えている。すでに変革を成し遂げた数学と自然科学の方法についてのカントの説明を見てみよう。数学については、カントは二等辺三角形の幾何学的論証を例に挙げている。二等辺三角形の最初の論証者は、すで

に与えられた図形の性質を受動的に読み取るだけではその証明が不可能であると悟った。そこで彼は、二等辺に挟まれた角の二等分線に沿って三角形を折り、等辺を重ね合わせるという操作を自ら試み、両底角も重なるという二等辺三角形の性質を発見した。言い換えれば、彼は自らの概念にしたがって何ものか（補助線）をア・プリオリに「考え入れ」（「置き入れ」）ることによって能動的に二等辺三角形を論証したのである。カントはこのような数学における「考え入れ」「置き入れ」の方法を、「構成」の方法としている。構成の方法が、数学における思考法の変革された方法である。

自然科学において数学の構成の方法に相当する思考法の変革は、「実験的方法」である。自然科学がこの方法を発見するまでの模索期間は数学よりもはるかに長かった。アリストテレス以来の中世の物理学では、何の前提もなく〈実体〉や〈目的〉といった普遍的概念がまず置かれ、すぐさまそうした概念を使用して特殊現象の説明がなされた。<sup>1)</sup> このような方法を独断的なものとして批判し、実験に基づいた方法による従来の学問の「大革新 (instauratio magna)」を提唱したのは、第二版の冒頭に置かれたヴェ

ルラムのベーコン（フランシス・ベーコン）であった。

斜面に特定の鉄球を転がしたガリレイの実験は、こうしたベーコンの革新に刺激された実験的方法であった。この実験において、ガリレイは数学における二等辺三角形の論証者同様、自然から受動的に何かを受け取ろうとしたのではなく、能動的に自然に働きかけた。カントによれば、それは自然から読み取るのではなく、彼が「予め考えておいた」自らの「仮説」を自然に「置き入れ」ることによって彼の問いに自然を答えさせ、仮説を「証明する」試みであった。<sup>2)</sup> もう少し詳しく言うなら、カントの解するガリレイの実験の方法は次のようなものであった。まず、ガリレイは手持ちの概念を分析することによって落体の法則をア・プリオリに仮説として設定した。そしてそれに続いて、こうして得られた仮説の証明のために、適当な斜面に、これまた仮説を証明するのに適当な「彼自身によって選定された重さをもった球」(B XII) を転がすという作業を行った。つまりガリレイの実験の方法は、全体として、i. 与えられたものを分析して仮説を立てる部分、ii. その仮説を実際に現象に投げ入れ、仮説の客観的妥当性を証明する部分によって成り立っているのである。われわれは i を実験的

方法における（仮説段階）、iiを（証明段階）と呼ぶことにしよう。仮説は証明を経ることによって外見上變化するわけではないが、証明の手続きを通じて実験対象となった現象の構成原理に他ならないこと、つまりそれを欠くなら実験対象が成立しないような法則であることが明らかになる。こうした二つの段階を含む実験的方法を採用したという意味では、トリチェリの真空実験も、シュタールの燃焼実験も変わるところはなかったとカントは考えるのである。

## B. 形而上学

### 1. 眞の方法

これに対し形而上学は、いわば長く戦士の誰もが領地を得ない戦場であり、未だに摸索状態にある。しかし形而上学にも一縷の望みがないではない。形而上学もまた数学や自然科学と同様、理性の学だからである。カントは形而上学の「思考法の変革」を「思考法の変革された方法」と言い換えた後、この方法が「自然科学者に做った方法」（*XVIII Ann.*）であるとしている。形而上学の「思考法の変革された方法」は、構成の方法を踏まえた実験的方法なの

である。<sup>(8)</sup>

カントはすでに一七六四年の『自然神学および道德の原則の判明性に関する研究』において、「形而上学の眞の方法は、ニュートンが自然科学に導入し、そこで極めて有益な効果を示した方法と根本において同じである」（*H 286*）としている。そして「未だかつて一つの形而上学も書かれていない」（*H 283*）にせよ、こうした「眞の方法」にしたがえば形而上学は可能であろうという見通しを立てている。「形而上学においても全く同様に、確かな内的経験すなわち直接的で明白な意識によって、何らかの或る一般的な性質をもった概念の中に確かに存在するような徴表を探し求めよ、そしてたとえ諸君が事象の全本質を知らずとも、事物における多くのことをそこから導き出すために、諸君はそれらの徴表を確かに利用できるのである」（*H 286*）。ここに言われる「眞の方法」が、ニュートンの『自然哲学の数学的原理』（一六八七年）に做った『自然科学の形而上学的原理』（一七八六年）を経て、『純粹理性批判』第二版においてようやくまとまったかたちで述べられる実験的方法として完成されるのである。

カントは実験的方法を次のように表現している。「……

天体の運動の中心法則は、コペルニクスが最初は単に仮説として想定したものに完全な確実性を与え、同時に宇宙構造を結合している不可視の力（ニュートンの引力）を証明したが、この力は、コペルニクスが感性に反してはいるがそれでも真の仕方、観察された運動を天体という対象のうちにはなくそれら対象の観察者のうちに求めることを敢えてしなかつたら、永久に発見されないままであつたらう……」（B XXII Anm.）。この「真の仕方」が、形而上学における「思考法の変革の本質的な要点」（B XVI）として述べられる、次のような、カントのコペルニクスの転回に相当する周知の表現となる。「全てのわれわれの認識は対象にしたがわねばならないとこれまで想定されてきた。しかしわれわれの認識がそれによつて拡張されるような何もかも、対象に関してア・プリオリに概念を通じて見つける全ての試みはこうした前提の下では失敗した。したがつて果たして形而上学の課題において、対象がわれわれの認識にしたがわねばならないと想定することでもつと行う行かないかどうかが一度試みられてはどうであろう。この想定はそれだけです、対象がわれわれに与えられる以前に何ものかを対象に関して確定すべきところの、対象の

ア・プリオリな認識の望み通りの可能性とよりよく一致する。この事情はコペルニクスの最初の思想と同じであつて、コペルニクスは、全星群が観察者の周りを回転すると想定したのでは天体の運動をうまく説明することができなかった、観察者を回転させ、これに反して星を静止させたらもつと行う行かないかどうかを試みたのである」（*ibid.*）。形而上学の思考法の変革された方法における要点は、「全てのわれわれの認識は対象〔の性質〕にしたがわねばならない」という「想定」から「対象がわれわれの認識〔の性質〕にしたがわねばならない」という「想定」への変革である。それまでの伝統的な形而上学は、予め前提された存在物が何であるかを問う存在論であつた。これに対しカントは、予め前提されるのはア・プリオリなわれわれの認識形式であり、そうした認識形式に対象がしたがうと想定するのである。そしてこの変革を「全星群が観察者の周りを回転する」という「想定」から、「観察者を回転させ、これに反して星を静止させたらもつと行う行かないかどうか」という「想定」への、コペルニクスの変革になぞらえているのである。

## 2. 二つの仮説

## a. 第一の仮説

実験的方法には仮説段階と証明段階とでも言うべき二つの段階が含まれている。形而上学における思考法の変革が実験的方法の一種であるなら、そうした変革もまたこれら二つの段階を含んでいるはずである。

カントが述べた「対象がわれわれの認識にしたがわねばならない」という「想定」は、仮説段階に相当する。カントは仮説段階を「純粹な部分」とも言っている。「(理論的認識と実践的認識といった)両認識については、その内容の多少にかかわらず、純粹な部分、すなわち理性がそこでは全面的にア・プリオリにその客観を規定する部分が、前もってそれだけで論述されねばならない」(B X)。仮説段階としての「純粹な部分」は対自的な考察であり、「全面的にア・プリオリにその客観を規定する部分」として、証明段階に先だつて「前もってそれだけで論述されねばならない」。実験的方法における仮説は、予め与えられた(ア・プリオリな)ものから設定されるが、(理論的)認識においてわれわれに予め与えられているのは直観形式と概念形式の二つである。したがって「対象がわれわれの認識

にしたがわねばならない」という仮説は、詳細に言えば、直観形式の仮説と概念形式の仮説という、二つの仮説の総称であることになる。直観形式の仮説は、「われわれの直観形式が対象にしたがう」という仮説から変革された(対象がわれわれの直観形式にしたがう)という仮説である。概念形式の仮説は、「われわれの概念形式が対象にしたがう」という仮説から変革された(対象がわれわれの概念形式にしたがう)という仮説である。

仮説が理論となるためには証明を経なければならぬ。証明が不可能な仮説は、ニュートンが否定したような、単なる憶説としての仮説にとどまる。カントにおける直観形式の仮説と概念形式の仮説の証明は、与件(多様)に投げ入れられたそれら形式が対象を構成するかどうかの吟味となる。これについてのカントの直観形式の説明は次のようなものである。「……私は(ア・プリオリな)直観が認識になるべきときには、これらの直観に立ち止まることはできず、表象としてのこれらの直観を対象としての何か或るものと関係づけ、対象をそうした直観によって規定しなければならぬ……」(B XVII)。直観がア・プリオリであることの対自的な説明が仮説段階であるが、そこにどまら

ず、ア・プリアリな直観を「対象としての何か或るもの」に實際に關係させる対他的な説明が証明段階である。概念形式についての説明も同様である。「……経験自身が悟性を必要とする一つの認識様式であり、私はこの悟性の規則を対象が与えられる以前に、したがってア・プリアリに私のうちに前提しなければならず、悟性のこの規則は、経験の全ての対象が必然的にしたがい一致しなければならぬようなア・プリアリな概念として表現されるものである……」(B XVIII)。「対象が与えられる以前に」悟性の規則をア・プリアリなものとして説明するのが仮説段階であり、そうした悟性の規則に「経験の全ての対象が必然的にしたがい」いうことを説明するのが証明段階である。

直観形式ないし概念形式を与件(多様)に投げ込むことによつて初めて対象が構成されるなら、仮説は客観的妥当性を持ち、(対象がわれわれの直観形式にしたがう)および(対象がわれわれの概念形式にしたがう)という仮説、総じて「対象がわれわれの認識にしたがわねばならない」という仮説は理論となる。「私はあの(コペルニクスの)仮説と類比的な、批判において論述される思考法の変革をこの序文においてはほんの仮説として提出するが、もっと

もこの変革は、本文自身では空間と時間についてのわれわれの表象の性質および悟性の要素概念から、仮説的にではなく確然的に証明される」(B XXII Ann.)。

こうして仮説の証明作業はともあれ終了したことになる。しかしカントはさらにこうした理論が経験的な対象の構成以外には妥当しないことを明らかにする説明を証明段階の一環として加え、理論の確かさを裏側から補強している。つまりわれわれの直観形式や概念形式は即自存在に適用されるなら意味をなさず(矛盾を生じる)、証明作業自体が不可能になるという説明である(B XVIII Ann.)。われわれはこうした説明を、証明段階の補助的な作業であると考えてよいであろう。

### b. 第二の仮説

しかし問題は残っている。それは、「対象がわれわれの認識にしたがわねばならない」という仮説から除外された即自存在(形而上学的なもの)の意味である。人間理性は形而上学的なものを追い求める「素質としての形而上学」を備えており、「われわれの(理論的)認識」の問題とならないものでも無視できないのである。いやむしろ、批判

におけるカントの最終的な狙いは、われわれの理論的認識の限界を見届けた上で、次にくるものによる即自存在の認識の可能性を解明することだったのである。

では即自存在を認識するのはわれわれのどのような能力か。理論的な認識能力が即自存在を認識できないにしても、理性の認識能力にはもう一つの実践的な認識能力がある。理論的な認識能力にア・プリオリな直観形式と概念形式が与えられていたのと同様に、実践的な認識能力にもア・プリオリなもの（自由の概念、直接的には道德法則）があるのである。こうして理論的な認識能力による即自存在の認識の失敗を経て、新しい仮説の設定が可能となる。〈物自体〔即自存在〕はわれわれの理論的認識にしたがう〉という想定を变革した、〈現象はわれわれの理論的認識にしたがう、物自体はわれわれの実践的認識にしたがう〉という仮説である（B XX）。

カントの実験的方法は二つの仮説を含むことが明らかになった。第一の仮説は「対象がわれわれの認識にしたがわねばならない」であり、この証明および証明補助の作業を経て、〈現象はわれわれの理論的認識にしたがう、物自体はわれわれの実践的認識にしたがう〉という第二の仮説が

設定される。実際に第二の仮説が証明されるのは「純粹理性批判」ではなく、実践的な認識能力を扱う著作においてである。形而上学の方法の書としての批判とは、二つの仮説とその証明（およびその補助的な作業）を含んだ手続きの総体なのである。

### Ⅲ. 革命としての変革

#### A. 一八〇度の革命

さてカントは数学や自然科学における思考法の変革を「革命 (Revolution)」の一つに数えている (B XI)。したがってこれらの方法に倣った形而上学の実験的方法もまた、一つの革命となる。カントはどのような意味で思考法の変革を革命に数えているのであろうか。

まず注目すべきは、数学や自然科学における長い模索状態から学の実験的な歩みへの移行が、歴史上の或る時点において、漸次的にはなく一時にしてなされたことである。カントは形而上学の変革のモデルを「突如として成就された一つの革命によって現在見る通りとなった数学と物理学の実例」(B XVI)に求めているのである。

しかしひるがえって考えれば、歴史上の一時点において



なされない、いかなる証明の発見も法則の発見もない。したがってそれだけの理由では、数学や自然科学における変革が革命とされることの説明として十分なものではない。それに做った形而上学の変革もまた革命としては役不足である。革命と言われるためには、そうした変革が突如なされたのみならず、その内容の変化もまた劇的なものであらねばならない。「この革命を成就したのは或る一人の人物が試みのうちで得た幸運な着想であったが、それ以来、人がとらざるをえなかつた進路はもはや迷いようはなく、したがって学の確実な歩みが永遠に無限の遠くまで辿られ指示された」(B XI)。こうした変革は、過去においてその一部分が成されていたものでも、未来において残りの一部分が成されるべきものでもなく、「或る一人の人物」によって全体として完全に成し遂げられたものである。このゆえに数学や自然科学は模索状態から完全に脱することができたのであり、一度この変革がなされた以上、未来においても再び模索状態に舞い戻ることはありえないのである。

われわれは、こうした数学や自然科学における思考法の変革が革命に数えられる理由を容易に理解することができるのであろう。われわれが今日呼びならわしている革命とは、

〈秩序の《急激》な変化〉を指す言葉に他ならないからである。この意味で、『純粹理性批判』においてカントによつてなされた形而上学の変革は、存在論から認識論への、あるいは客体としての存在中心の立場から主体中心の立場への一八〇度の転回であり、革命を果たすことになるのである。

## B. 三六〇度の革命

### 1. 革命の意味

#### a. 概念史

〈秩序の《急激》な変化〉であるがゆえに形而上学における変革が革命に数えられることは明らかになった。しかしわれわれはさらに問うことができるであろう。そうした革命が他でもないコペルニクスになぞらえられるのはなぜか、と。この問いは愚問と思われるかもしれない。なぜなら、コペルニクスこそは今日われわれが革命と呼ぶ、思想上の〈秩序の《急激》な変化〉を成し遂げた人物の代名詞だからである。しかし余り指摘されないことであるが、コペルニクス自身は、こうした革命概念を意識していなかつたのである。そこで、改めて「革命」という言葉の意味を

確認することにしよう。

今日われわれが使用する Revolution の訳語としての革命は、ラテン語の *revolutio* に語源し、もともとは「天体の回転運動、つまり公転運動と自転運動」を指す言葉であった。最初期の革命概念の使用は天文学（占星術）の領域に限定されていたのである。

こうした天文学的な意味での革命概念の使用は長く続き、革命概念が天空から降ろされ、天体の運動が影響すると考えられていた地球上の出来事（特に最初は自然界の大変動に対して使用された）に使用されるようになったのは、ようやく近世の初頭になってからである。地上での出来事のうち、人間が起こした政治的な出来事に対して革命概念が使用されるようになったのは、国によって若干の違いはあるにせよ、おおよそ十七世紀に入ってからである。政治的な意味での革命概念の使用が一般的になるのは、フランス革命以降であるとされている。

政治的な意味での革命による社会体制の変化は、一般市民の生活や思想にも多大の影響を及ぼすことになった。こうして革命が、「精神的・社会的秩序の急激な変化」という、今日の用法に近い抽象的な意味を徐々に獲得すること

になったのである。<sup>1)</sup>

#### b. コペルニクスの革命

歴史的に見れば、革命概念は一義的でなく多様な意味の変遷を重ねている。コペルニクスはどのような意味で革命概念に関わったのであろうか。

カントが注目していたコペルニクスの思想は、コペルニクスが一五四三年の『天球の回転について』(*De revolutionibus orbium coelestium*)<sup>2)</sup>において明らかにしたものである。周知のように、コペルニクスはこの書において、「回転」しているのは観測者のいる地球の側であり、地球から見える恒星や遊星の公転運動は見せかけのものであることを証明した。太陽を含む恒星や遊星が地球の周りを公転（革命）するのではなく、地球が自転（革命）しつつ他の遊星とともに宇宙空間を公転（革命）すること、それがコペルニクス自身が考えた「革命」の意味であった。

しかしこうしたコペルニクスの思想は、今日われわれが彼に意味づけるような思想の根本的な変化をも伴っていた。コペルニクスに先立って、いやそれ以降も長く勢力を持ち続けた宇宙論は、アリストテレス・プトレマイオスの

宇宙論であった。この思想は、コペルニクスの思想とは反対に宇宙の中心に地球を置き、恒星や遊星は地球から見える通りに地球の周りを回転しているとする思想であった。こうしたアリストテレス・プトレマイオスの宇宙論に対しコペルニクスの思想が根本的な変化を伴うことは言うまでもない。しかもアリストテレス・プトレマイオスの天動説は、キリスト教における強力な地球中心説の思想的基盤となっていた。問題は学問上にとどまらないことをコペルニクス自身も承知していた。しかしそうした事情が後に Revolution と呼ばれるとは、彼には知る由もなかったのである。

コペルニクスの革命は、〈天文学的意味での革命〉と、今日われわれが使用する〈抽象的意味での革命〉という二つの意味側面をもっていた。しかしわれわれは誤ってはならない。コペルニクスの革命は本質的には前者の意味であったが、他の思想との関係において同時に後者の意味をも与えられるに至ったのである。

## 2. 回転運動

さてコペルニクスの革命が以上のような特徴をもつな

ら、コペルニクスになぞらえられたカントの革命もまた、そうした特徴をもっているとは考えられないだろうか。

カントが使用する革命概念については、従来その三つの用法が何の脈絡もなくそれぞれに注目されてきた。i. すでに確認した『純粹理性批判』におけるコペルニクスの転回の意味での革命、ii. 晩年の政治的著作において使用される政治的意味での革命、iii. 同じく晩年の『宗教論』（一七九三年）において使用される、抽象的な用法から転じた、「回心」の意味での革命である。しかしカントが天文学的意味の革命を使用していることはこれまでほとんど注目されてこなかったし、それがカントのコペルニクスの転回に影響を与えているという指摘は皆無であった。カントが天文学的意味の革命概念を知っていたことは、彼が初期の自然科学的な著作において、月の公転運動を指す革命を使用していることから明らかである（1788）。この事実を踏まえた上で、もう一度カントのコペルニクスの転回の意味を再確認してみよう。

形而上学における思考法の変革の内容は、認識が対象ではなく対象が認識にしたがうという想定（仮説）とその証明であった。すでにわれわれは、この移行の（急激さ）

ゆえに形而上学における思考法の変革が抽象的意味での革命に相当することをまず確認した。これはカントの革命が伝統的な形而上学（存在論）との関係において抽象的意味の革命であったことを意味している。しかし今、改めてカントがこの想定をどのような意味でコペルニクスになぞらえていたかを想起するなら、カントはそれを「全星群が観察者の周りを回転する」という想定から、「観察者を回転させ、これに反して星を静止させたならもつとうまく行かないかどうか」という想定への変革になぞらえていたのである。これは、〈回転運動の主体〉が被観察者である対象の側にはなく観察者である主観の側にあると言っていることに他ならない。つまり伝統的な形而上学との関係において抽象的意味での革命となったカントの変革は、すでにそれ自身の内容において三六〇度の転回であり、天文学的意味での革命に相当するのである。

### 3. 秩序

カントにおける主体の回転運動とは主観による構成作用であり、われわれはこの構成作用によって経験の対象を構成し、ひいては現象世界を構成することができる。しかし

カントがこうした構成作用を回転運動になぞらえるのはなぜだろうか。われわれの解釈を補強するために、この点についても明らかにしておこう。

先にわれわれが指摘した、カントの天文学的意味での革命の使用例は、一七五五年の『普遍的自然史と天体の理論』に見られるものである。この書はニュートン物理学の原理を拡張して宇宙の生成を純力学的に説明したものであり、〈カント・ラプラスの星雲説〉を含んでいる。カント・ラプラスの星雲説は、始めに引力と斥力を備えたカオス（星雲状物質）を想定し、カオスが引力によって固まって天体となり、天体が斥力によって回転運動を起し、その結果として太陽系が発生したとする太陽系の発生説である。この時期のカントは、こうした力学的な説明が世界の創造者としての神という考え方と矛盾せず、むしろこうした説明が神による世界創造の完全性の証明になると考えていたのである。

こうしたカント・ラプラスの星雲説を考慮するとき、われわれは、この説が二つの点で主体の回転運動、つまり主観による対象の構成説と類似していることに気づかねばならない。i. 両説とも自然科学の方法論を適用することに

よって確立されており、しかも、ii. 回転運動が秩序を構成すると考える説だということである。i はすでに確認した。ii については、カント・ラプラスの星雲説は太陽系の発生過程の説明を通じて神による世界の創造を基礎づけようとした説であり、対して主観による構成説はあくまで現象世界の秩序を構成する主観の説明である。あるいは前者はキリスト教的な神の創造を言う独断的な思想であり、後者はむしろデミウルゴスのな製作用業に類似する思想である。したがって両者を無雑作に同一視できないことは言うまでもない。神による世界の創造と人間理性による現象世界の構成とはその距離を隔てること無限であり、それゆえにこそ第二の仮説の必要性も生じたのである。しかし神が材料なしに引力や斥力を介して混沌から世界を創造することと、主観が「運動」(B154)とも言われる結合力によって雑多な多様から空間と時間の中に対象(および現象世界)を構成することは、ともに(回転運動によって混沌から特定の世界を秩序づける)という意味では類似していると言えるのである。「思考する主観は、可能的な経験の対象としての世界を空間と時間において自ら創造する」(XXI 23)。天界に見られる秩序と主体の内在的な秩序を統一的原理に

よって説明することが、カント哲学を貫くモチーフの一つだったのである。

以上、われわれは、カントのコペルニクスの転回が(秩序の《急激》な変化)および(主体の回転運動)という二つの意味側面をあわせもった概念であることを明らかにした。このような二面性は、カントのコペルニクスの転回がコペルニクスの《革命》に倣ったものであることの結果なのである。

#### 註

カントの著作からの引用に付した( )内の数字は、ローマ数字がアカデミー版カント全集の巻数を、アラビア数字がその頁数を表す。ただし『純粹理性批判』の第二版はBとし、オリジナル版の頁数を示した。( )内および引用に付した傍点は筆者(引用者)によるものである。

(1) E. カッシーラー『カントの生涯と学説』(門脇卓爾他訳、みすず書房、一九八六年)、七〇頁参照。

(2) 仮説の正当化の手続きに関してカントが使用するのは、ほとんどの場合「証明する(Beweisen)」という言葉である。

(3) 高坂正顕は『カント解釈の問題』(弘文堂、一九三九年)の「実験的方法としての超越的方法」において、いち早くカントのコペルニクスの転回を実験的投げ入れの方法として解

釈している。

(4) この部分の説明は、拙論「カントの革命論」(『哲学研究年報』関西学院大学哲学会、第二十九輯、一九九五年)と一部重複する。なお革命概念の概念史については、筆者は *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, hrsg. von J. Ritter/K. Gründer, Schwabe & Co., Basel, 1992, Bd. 8, S.957-73 に於ける H. Günther の解説から最も多くを学んだ。

(むらやま・やすふみ 大谷大学非常勤講師 西洋哲学)

『哲学論集』第45号 正誤表

	誤		正
34 頁上 8 行目	むらやま・やすふみ	→	むらやま・やすし
56 頁下 1 行目	親鸞の宗祖	→	親鸞の宗派
57 頁下 6 行目	社会勢力上としての	→	社会勢力上の
61 頁上 5 行目	教義をを説き	→	教義を説き
78 頁上 1 行目	榊井督也	→	榊井督也
編集後記上 12 行目	不熟心	→	不熱心